The Japan Society of Educational Sociology

■ 書 評 ■

天野郁夫 ［著］

『教育と近代化—日本の経験—』

東北学院大学　菅山真次

本書は，日本の「近代化」過程における教育の問題をテーマとする，4本の独立の論文からなる論文集である。はじめに，本書に収録された論文の題名と，その初出（執筆）年次を示しておこう。

1　初等義務教育の制度化－ウェステージの視点から（1967年）
2　工業化と技術者育成－人材形成のメカニズム（1963年）
3　大学教授集団の形成－エリートからプロフェッションへ（1977年）
4　講義録と私立大学－知識伝達の日本的形態（1994年）

これらのうち，もっとも古い第2論文は未発表の修士論文であり，著者の研究者としての出発点に位置するものでありながら，みごとというほかはない出来栄えを示している。この論文では，明治初年から大正末年にいたる技術者教育の成立と発展が，日本の工業化過程のなかで「それが期待されまた現に果たしてきた役割や機能に重点をおいて」骨太に描き出されている。執筆から35年を経た現在でも，近代日本の技術者教育の構造と機能を，一貫した方法でこれほど包括的に論じた文献は現われていない。と同時に，この論文からは，すぐれた研究者の処女作が往々にしてそうであるように，天野氏のその後の精力的な研究の展開を予示する，オリジナルな着想や視点をみてとることができる。

ところで，著者はもともと経済学部に所属し，卒業論文では開発途上国の経済発展と人材形成の問題をテーマに選んだが，民間企業を1年で退職後は教育学部に学士入学した。教育社会学を専攻してからは問題関心を労働力の量から質へと移したが，その背景には，経済の発展・成長要因としての教育の重要性を強調しながら，教育と人材形成，経済発展の具体的な関連をまったくみずに，ひたすら計量分析に終始する成長経済学的アプローチ －さらにいえば構造＝機能主義の立場に立つ「近代化論」－ への不満があったという。第2論文は，このような問題意識を歴史実証分析へと結実させた成果であった。それは，教育を労働力の形成という観点から捉え，その発展を工業化の過程と結び付けて分析している点で，明らかに「近代化論」の枠組みに依拠している。にもかかわらず，この論文は，教育と経済をストレートに結びつけるのではなく，むしろそれぞれが固有の論理をもちつつも相互に規制しあう，その複雑な関係を具体的に描き出すことを課題としている点で，構造＝機能主義の立場を大きく越え出ているのである。

このような課題を果たすために著者が

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

とった戦略は，教育と経済をつなぐインターフェイスである「市場」に焦点をあてて，これをできるだけ歴史的・具体的に工業技術者の階層別・需要産業の部門別にブレイクダウンして，その需要・供給のメカニズムを考察することであった。これは，今日では実証的な経済史・産業史研究のオーソドックスな方法になっている。おそらく，著者は，こうした方法を産業分析でもみるべき成果をあげた，氏原正治郎・隅谷三喜男氏等を中心とする労働経済学の潮流から学んだのであろう。この論文がさらにユニークなのは，しかし，そうした「需給構造」の特質と変化を解きあかすカギを，「それぞれの工業技術者教育機関の成立過程を，工業の技術的特性や地域特性と結び付けて解明する」ことにもとめている点である。その分析は，地域との関連がもっとも緊密だった中等工業学校－下級技術者の場合に，一段と冴えをみせる。ここでは，それぞれの学校の設立経緯が『学校史』や『府県教育史』をもとに検討され，工業学校の多くが地域の在来産業関係者の要請に応えるものとして成立したこと，近代産業の下級技術者の育成は明治年間は主に各種学校の発展に委ねられたこと，しかし大正期以降は工業学校が重化学工業中心の産業発展に対応した人材の育成に重点を移し，地域の学校としての性格を大きく後退させたことなどが，明らかにされている。

近代日本における中・高等教育機関の成立・発展は，工業化の進展や，国家の政策から直接に説明できるものではない。「国家の須要」に応じることを目的とした帝国大学などの例外を別とすれば，これらの学校はその多くが民衆のさまざまな「教育要求」に対応して成立し，またその変化に敏感に反応しながら発展をとげてきた。本書に収録された第1論文は，初等教育においても，就学義務年限の定着・延長を権力的に押し進めようとする「国家意思」が民衆の鋭い抵抗にあったさまを，社会階層や性差といった人びとの集団的特性に史料の許すかぎり目を配りながら，克明に描き出している。日本の教育システムの特質は，民衆の多様な教育要求を視野に入れて，その社会階層的・集団的基礎を明らかにすることで，初めて理解することができる。そして，こうした視点こそ，1970年代における高等専門学校を切り口とした，天野氏の独創的な近代日本高等教育史研究の導きの糸となったものであった。

専門的職業の形成過程を高等教育機関の制度化と結びつけて論じた第3論文は，このような教育と社会階層との関係を分析の要とした，著者の高等教育史研究の延長線上に位置づけることができよう。1980年代に入ると，著者の関心は中等教育と社会階層の比較史研究へと移り，こうしたなかから日本における学歴主義の成立過程をマクロ的に分析した主著『教育と選抜』，『試験の社会史』を生み出していく。だが，著者は，このようなマクロの分析のみでは満足せず，視点をミクロな民衆の日常生活のレベルに移し，学歴が人びとの「生活世界」においてどのような意味をもったかを，さまざまな社会集団について考察することで，

NII-Electronic Library Service